子供の心

天野誠齋

子供と物眞似

□子供は變化を喜ぶ

家庭におきましても、學校におきましても、子供を教育するには、その子供といふものは、どんなものであるかと云ふことを、よく知らなければなりません、丁度木工をする者は、木材の性質をよく知らなければならず、金工をするものは、金屬の性質を十分に研究して居らなければならぬのと同樣で御座います。

一體子供の心といふものは、大人の心とは凡ての點において、餘程相違して居るところが御座います、一般から申しますと、子供の心は非常に變化を貴び、また俗に眞似事と申す模倣心に富んで居ります、此の模倣といふ事が、子供の時代の凡ての生活に現はれ、四歲——五歲から、七、八歲までの子供といふものは、萬事が此の模倣をもつて滿たされて居りまして、模倣の全盛時代でございます。

此頃の子供のする事、なす事をごらんになりますと、直ぐ氣附く事で、子供の遊戲は、家庭や社會の出來事で持ちきつて居ります。

よく市中で六、七歲位の子供の軍隊を見る事が御座いますが、その規律の正しく上官の命に服すこと、兵營生活の軍隊も及ばぬかとも見られる程で、そのしほらしさに足を止めざるを得ないことは、多くのお方の御承知と存じます。

たゞに兵隊さんの眞似ばかりでは御座いません、活動寫眞を見れば、その眞似をなし、芝居に行つて來ては、その眞似、相撲を見れば、座敷でもなんでも遠慮はない、友達

が毬を持てば毬、凧を持てば凧が欲しくなるといふやうな工合で、萬事が人眞似ばかりでございます。

□模倣の材料

子供は生れるときから、親兄弟の間で育つので御座いますから、最も多く子供に模倣の材料を與へるところの者は家族であると思ひます。

内から外へ出るやうになつて、初めて外部のものを眞似るやうになるので、外に出る樣になつても、一日の半は家庭で過すので御座いますから、子供が親兄弟に似るといふ事は、遺傳にもよることですが、常に親しく其の言行を見習つて居るといふ事も、その原因の一つであると云ふ事を、學者間にも申されて居ります、これは明に子供の模倣性があると云ふ事を示したものと思ひます。

□面白い實例

此處に面白い例が御座います。

或る豪家に五歳ばかりになる、男の子が御座いました、その子は近所に住んで居つた、若い教師のもとに遊びに行くのを、何よりの樂しみとして居ました。

教師の方でも其の子供を可愛がつて居ました。

或時家の臺所に這入つて、何時もしたことのない摘食ひをしたので、どうしてそんな不行儀をするかといはれましたときに。

『お隣りの先生がやつたから』

と答へて、別に惡いことをしたと云ふ樣子も御座いませんでした。

また、その子は新聞を持てば、必ず仰向いて寢る癖がありましたが、これも先生がするから、するのだといつて居つたといふ事が御座います。

が子供といふものは、こんな些細な事までも、よく人眞似をするもので、殊に自分の親しくする人程、多く眞似るので御座います。

これが子供の眞の性質であり、子供の心であるので御座いますから、抑へやうとしたとても出來ることでは御座いません。

此の頃の子供の心といふものは、張り詰めたゴム毬のやうなもので、外部からの刺戟に對して、強い反應力をもつて居るのですから、外部から受入れたところの刺戟といふものは、これを動作に現はさずには居られないので御座います。

口模倣は子供の生命

一體模倣といふことは、心の固まらない證據で、一定の主義方針がないからで御座います、成長するに從つて、次第に其の強さを減じて參ります。

然しながら大人になつたからとて、全然消えて仕舞うのではありません。

佛蘭西の社會學者タールド氏は

『社會の現象は、凡て模倣が基礎である』

といはれましたが、一面から見ますと、爾うも思はれる程大人にも此の模倣的精神といふものは、存在して居ます、そしてまた夫れが甚だ必要なる精神であるので御座います。

殊に子供といふものは、此の模倣によつて、心も身體も發達して行くのであります。

處が親達が子供といふものを、よく知らないと

『此の子は人眞似ばかりして居る』

とか、又は

『此の子は惡戯ばかりして居る』

とかいふやうに、子供ばかりを責めて、社會の罪、自己の責任などには考への及ばない事が御座います、眞似るといふ事は、子供には止める事が出來ないのです、模倣といふことは、子供の生命なので御座います。

そこで親などは——教師は——常に子供の境遇といふものを善良にし、善良なる模範によつて、子供を教育するの覺悟がなくてはなりません。

特に此事は家庭教育において必要な事と思ひます。

『其の母を見て、その子を察せよ』

といふ事も昔からよくいふて居ります。

また彼の孟母が我子の爲めに、三度其の居を遷したといふ事も、何人も知る名高い話でありますが、何れも子供の

教育上、境遇の大切な事、模範の善良でなければならぬ事を物語るものであると思はれます。

夫れ故に、どこ迄も子供の心といふものを知りぬいて、子供の將來のため、教育の道を進めなければならぬと考へます。

眞似事から大怪我をした實例

茲に子供の模倣性――眞似事――から遂に大怪我をした實話があります。

六歳になる子供ですが、或る日親がその子供を連れて、輕業を見せに往きました、子供は珍らしい不思議な藝をいろ〳〵行りますので、非常に喜んで見て居ました。

翌日になると其の子供は、近所に居るお友達を連れて來て、二階へ昇り窓の欄干の處で、昨日見て來た、輕業の眞似を頻りにやつて居ます。

『而白いだらう、昨日斯んな事を行つたんだよ、い〳〵かへ』

又欄干へつかまつては、クルリ〳〵と引繰返つて、輕業の眞似をしては、お友達と仲好く遊んで居ます。

實際二階の窓の欄干を握つて、輕業の眞似をするなぞゝいふのは、何んといふ危險なことでしやう、失れを無心の子供は、危險も何も知りませんから、至つて平氣で失れを行つて遊んで居ました。

すると果して手を外して、窓から往來へ落ちました、二階の子供等は呆氣にとられて、下を見て居ましたが、親達は今往來へ何か二階から落ちた物音に驚いて

『何が落ちたんだらう……何うしたんだらう』

と出て見ると、思ひ懸けない我が愛兒が、殆んど氣絶せんばかりに悶え苦しんで居ました、親達は愕然として、素足で戸外へ飛出し、子供を抱起して見ると、まだ綽切れた譯でもありませんので、直ぐに醫師の許へかけつけました。

幸に醫師も在院でしたから、直ちに診察すると、左程の負傷ではありません、只一時の驚きで、氣絶せんとしたのであります。

よつて安靜に寢せて、種々手當を加えますと、大分元氣が出ましたが、親達も何うして二階から落ちたのか、誤つて手でも辷つて落ちたのだらうと思つて、跡で樣子を訊し

て見ると全く前日見せた輕業が面白かつたので夫れを二階の欄干で眞似――模倣――をしたのであります、そして手を外して往來へ落ちたと云ふ事實が判つたさうです。

此の子供の如きは、實に不幸中の幸福で、撲ちどころでも惡かつたら、遂にその儘になつて仕舞つたかも知れません、是等は子供の模倣性から生れた悲劇ですが、無邪氣な子供には往々斯んな實例があります。

誤り易い家庭のおしへ

口干渉し過ぎる事

世の親が、子供を教育して行く上に、誤つた仕方が大別して三つあるやうに思はれます。

其の一は干渉し過ぎる躾け方で、比較的教育ある親に多く見るところであります。

どんな躾け方をするかと言ひますと、殆んど朝から晩まで、細かい注意や訓誡の言ひづくめで、子供は一刻も自由な天地を見出すことが出來ません。

少しでも夫れに違ふ樣な事でもありますと、夫れから夫れへと小言の連發で、其の口喧しい事誠に驚くの外ありません。

けれども果して子供は、此樣に煩はしい注意や、訓誡を一々その通り守ることが出來るでありませうか。

「過ぎたるは尚及ばざるが如し」

と言ひますが、其の結果は或は之れに類するものが、あらうかと存じます、如何に多くの注意や訓誡を與へましたからといつて、夫れだけ優つた品性の子供になるとは決して申されぬのであります、要は夫れを守ると、守らぬとによつて、子供の品性は決定されて行くものですから單に口喧しく干渉致しましたからと云つて、夫れで理想的の躾が出來るものではありません。

どんな良藥でも毎日用ゐて居りますと、遂には其の効目が無くなるもので御座いますが、是れと同じ道理で、注意や訓誡を始終聞き慣れますと、次第にその權威が無くなり從つて其の効力をも失ふ樣になるのであります。

多くの子供のなかには、親の小言は申すに及ばず、教師

の叱責さへも何んとも感じないかと思はれるものも御座いますが、此の種の子供は、多く斯樣な教育を受けた結果ではなからうかと存じます。

また彼の盆栽の植物は、枝振りや恰好など、誠に美しく出來て居ります、けれども、どうも生々とした元氣に乏しいもので御座いますが、是れも人が多く手入れをする結果で、やはり子供でも餘りに干渉しますと、或は萎縮したり、卑屈になつたりするやうなことも御座います。

エミールに

『人は神によつて造られた時は、善であるけれども、人の手に入つて破壞される』

といつて御座いますのも、確に一面の眞理をもつて居る事と思ひます。

□可愛がり過ぎる

其の二は可愛がり過ぎる教育で、是れは多くの親の陷り易い事であります。

その躾け方を見ますと、餘りに子供大事に、何んでも子供の要求ごさへあれば、事の善し惡しにかゝはらず、一も二もなく滿足させ、その機嫌をとる爲めには、どんな高價な玩具でも直ぐに買つて與へ、又どんな骨の折れる事でも少しも厭はず、全く子供の奴隷かと思ふ程であります。

寒い時には風邪をひくからといづて、運動の出來ない程に重ね着をさせますし、又暑い時には病氣になるからといつて、日蔭にばかり遊ばせて置くといふやうに、餘りに軟弱な甘やかした教育の仕方であります。

親として子供を愛せぬものは御座いませんが、果して是れが眞に子供を愛するものゝ執るべき途でありませうか。

此の樣な教育によつて成長しました子供は、遂に氣隨氣儘のものになるばかりでなく、身體も薄弱になり、從つて僅の事にも直ちに病ひに罹るといふやうな、誠に憐むべき境遇にならざるを得ないのであります。

□放任教育

其の三は放任教育であります。

如何なる親も、子供を絶對に放任して置くと云ふことは

御座いません。

けれども其の教育に餘り意を用ひないと云ふものは、往々見受けられる事であります、總て子供は、種々の質問を發するもので御座いますが、無關心な父母は、仕事に忙がしい爲め、折角の質問も少しも取合はず、また惡い事をしても、子供のすることは、仕方がないといつて顧みず、全く子供の爲す儘に放任して置く向きも御座います、然しながら子供は斯樣に放任して置きましても、立派に成長するものでありませうか。

勿論子供には、將來大に發展すべき天賦の能力が御座いませうが、此の能力も其の儘に打ち捨てゝ置きましたなら、決して發達するものではありません、子供が人としての發達を遂げることの出來ますのは、全く教育の力によるといはなければなりません。

玆に教育といひましても、單に學校教育はかりを意味するものではありません、その大半は家庭教育の賚といはなければならぬのであります。

所が往々此の重大なる家庭の教育を等閑に附し、兒童の將來を誤るものゝありますことは誠に慨嘆に堪えぬ次第であります。

以上擧げました三つは、何れも家庭教育の誤りでありますが、其の何れにも陷らず、最も適當な教育を施すと云ふことは、また至難の事で御座います、而して眞に子供を愛するものは親であり、眞に子供を知るものも親でありますから、一度思ひを玆に致しましたら、必ずや其の間各自最善の教育法を發見することが出來やうと思ひます。

精神若き日のかぎり

われら、老ゆるなけん

O・W・HOLMES